



〒975-0031
福島県南相馬市原町区錦町一丁目 30 番地
TEL:(0244)26-1315
FAX(0244)26-1318
E-mail:sousou.kyouiku@pref.fukushima.lg.jp

令和 6 年度 震災・原発の経験・教訓・復興状況伝承事業

ジャーナリストスクール

(主催：福島県、ふくしまの学び実行委員会)



今年度も県内の子どもたちが相双地区取材し、震災と原発事故から復興している姿を新聞にまとめて発信していく「ジャーナリストスクール」が8月8日から17日にかけて行われました。相双教育事務所では、初日の子どもたちの取材活動のお手伝いのため参加しました。今年度は相双地区の子どもたちも多数参加しており、被災地に生活している生の声も届けることができました。

今回は、東日本大震災・原子力災害伝承館見学と、相馬双葉漁業協同組合と請戸の田植踊りの取材の様子をレポートいたします。

レポート I 東日本大震災・原子力災害伝承館見学

取材の前に、震災を直接体験していない世代、当時はまだ赤ちゃんだった世代の子どもたちに「東日本大震災と原子力災害とは何だったのか」という事を少しでも見知ってもらうために館内の見学を行いました。

子どもたちは、写真や展示物を解説を聞きながら見学していくうちに、今いる場所で大変なことがあったのだという事を少しずつ理解していきました。福島県に生きる自分たちにできることや、故郷への思い、当時の大人たちの対応や姿など一人一人視点は違っていました。午後からの取材に対する思いが高まっていました。

記憶の風化とよく言われていますが、今回集まってくれた子どもたちをはじめ、若い世代への記憶のバトンパスは確実に行わなくてはならないと感じました。



レポート II 相馬双葉漁業協同組合（請戸漁港）

請戸漁港を訪れ、漁業協同組合の職員さんから、東日本大震災で受けた被害の状況や復興の過程で苦労した話をお聞きました。「漁港を何とかしたい。」「以前よりもこの仕事が楽しくなった。」「仕事は、自分に合っていると思えてきた。」など、仕事に対する向き合い方も教えていただきました。また、請戸地区では新鮮で生きがよいので、魚を加工する（干物やかまぼこにする）文化はほとんどなく、刺身や焼いて食べるのが最高と考えており、魚は築地にも送られていることを知りました。

請戸地区は、地域で子どもを育て、地域が家族のようなものであって、いざというときは、助け合って子育てをしてきたそうです。今は、隣近所の関係が大きく変わったようで、「震災以前の請戸の生活、あの頃に戻りたい。」という言葉が、心に響きました。

また、海水の温度が上昇したこともあり、現在、水揚げされる魚の種類が大きく変わったそうです。「トラフグは採れるが、鮭やイカナゴ・コウナゴは採れない。」「ホウボウやワタリガニは採れるが、アカガニが採れない。」「アイナメやミズダコがいなくなった。」いただいたパンフレット「請戸漁港のしおり」で、魚の種類を確認しました。

「食えば分かるさ、請戸もの」「漁は、請戸の魂」「むさんこ（一生懸命）行けば！」請戸の魅力を知った時間となりました。



製氷・貯氷施設での体験



レポートⅢ 請戸の田植踊り

①田村さん（苔野神社宮司）への取材



昨年度に再建された苔野神社は1300年以上の歴史のある神社で、請戸地区の五穀豊穡と海の恵みをお祈りする神社です。かつては小島にあったそうですが、波に侵食されて島がなくなってしまい、現在の地に建てられたそうです。ここで行われる安波祭は請戸地区の人々の心のよりどころとなっていました。

しかし、2011年の東日本大震災の大津波で社殿は全て流されてしまい、宮司さんも犠牲になってしまいました。今回取材させていただいた田村さんは、同じ町内の初發神社の宮司さんでもあり、地元の方々からの願いで苔野神社の宮司もしています。

田村さんが一番伝えたかったことは、神社は地元の皆さんに支えられているという事でした。現在はほとんど住民がいない請戸地区ですが、故郷を想う気持ちは少しも衰えてはいなく、そのよりどころとして神社は大切だということです。

新しい神社には実は震災前から伝わっている部分もあります。入り口付近にある大きな石碑や鳥居の文字などです。これらは震災がれき等を片付ける作業員の方々が、処分せずに保管してくれていたものです。請戸出身ではなくても、故郷に対する思いというのは全国共通なのでしょう。

子ども達からは、どの様な思いで宮司を務めているのかといった質問がありました。ふるさとのために力を発揮してくれている方々の思いに子どもたちは気付きました。

②佐々木さん（請戸芸能保存会会長）への取材

神社の取材を終えると、伝承館に戻ってきて請戸芸能保存会会長の佐々木さんからお話を聞きました。現在いわき市にお住いの佐々木さんとはZOOMを用いてのオンライン会議となりました。

佐々木さんは終始優しい口調で子どもたちにお話を下さり、対面での取材はできませんでしたが、温かい雰囲気の中で話を聞くことができました。

佐々木さんが一番伝えたいことは、故郷を思う気持ちでした。震災と原発事故で日本中にバラバラになってしまった請戸の住民を田植踊りを通して、つながり続けられるように、御尽力された様子が伝わってきました。

間違いなく辛くて大変だったのに、明るく優しく表現してくれていましたが、田植踊りをつないでいこうという強い心が伝わってきました。しかし、子どもたちから「一番大変なことはなんですか」という質問があった場面では一瞬言葉に詰まっていた様子もありました。地域の人だけではなく、様々な援助を受けながら田植踊りを守ることを大変さを知ることができました。



③横山さん（請戸の田植踊りの踊り手）への取材

震災前の小学4年生から踊り続けている横山さんは、現在は伝承館にお勤めされております。震災当時は6年生でした。

横山さんからは動画や写真を使いながら、震災前の請戸地区の様子や、実際の田植踊りの様子について教えていただきました。震災前の請戸地区にはたくさんの住宅が並び、大変にぎわっていたと話聞いていましたが、実際の航空写真を見せていただくと先ほど見てきた神社と、震災遺構の請戸小学校しかない風景とのギャップに驚きました。

また、仮の祭壇の前で踊ったり、仮設住宅で踊ったり、アクアマリンふくしまで踊ったりした動画からは、困難の中でも頑張っていて継承してきた様子が伝わってきました。

一方、震災前の動画からは、田植踊りが地域の皆さんの生活の一部として親しまれていた様子が伝わってきました。

子どもたちの質問に答える形でおっしゃっていましたが、震災後の田植踊りに対して、初めは避難でバラバラになっていた友達と会えるんだという思いが一番だったと教えてくれました。ジャーナリストスクールの子どもたちにとっても共感できる話でした。一方で、今は田植踊りを絶対に無くしたくない、つなげていきたいという気持ちも聞かせてもらいました。どちらの気持ちも、取材した子どもたちには響いたことと思います。

今回は、その他に「浅野燃系（株）双葉事業所」「陶芸の杜おおぼり」「双葉警察署浪江分庁舎」「リブルンふくしま」の取材も行っています。それぞれ子どもたちが新聞記事としてまとめて発信します。完成しましたらご案内しますので、楽しみにしてください。

